



## 齋藤軍治京大名誉教授に紫綬褒章



分子科学研究所のOB（当時 分子集団研究系 助手）であり京都大学名誉教授（現在、名城大学総合研究所教授）の齋藤軍治先生が平成21年度春の紫綬褒章を受章されました。門下生の一人として、また物質科学研究に携わる一人として、心よりお祝い申し上げます。

受賞理由は「機能物質化学研究」ですが、齋藤先生の最も有名なご功績としては、BEDT-TTF系とよばれる有機超伝導体物質の開発であることは、皆様ご存じのことと思います。このBEDT-TTF系は単に和製初の有機超伝導体分子というだけではなく、次元性の向上、立体障害を利用した結晶内分子配置の重要性、強い電子相関といった、今なお物性分野の重要視されている概念の本質を突いた物質デザインが施された物質群です。そのまさに最初の論文「Two-Dimensionality and Suppression of Metal-Semiconductor Transition in a New Organic Metal with Alkylthio Substituted TTF and Perchlorate, Solid State Commun., **42**, 557-560 (1982)」は、齋藤軍治、榎敏明、鳥海幸四郎、井口洋夫（敬称略）といった当時は分子研の新進気鋭の方々（今では大先生の方々）による共著であり、まさに古き良き時代の分

子研から発信されたことは特筆すべき事でしょう。

齋藤先生は、1972年に北海道大学で理学博士の学位を取得された後、米国およびカナダで博士研究員としてご研究を積まれました。帰国後は、1979年に分子科学研究所助手、1984年に東京大学物性研究所助教授を経て、1989年に京都大学大学院理学研究科化学専攻の教授とられました。一貫として機能物質化学を御専門とされ、物質開拓に抜群の成果を挙げて来られました。開拓された物質群は多岐に渡り、700報を超える論文や70編を超える総説・著書を著され、被引用回数が400回を超える論文も複数出版しておられます。先に述べたBEDT-TTF系の有機超伝導体はその後も国内外の研究者に多くのインパクトを与え大きく発展を遂げています。齋藤先生ご自身も高い臨界温度を持つBEDT-TTF系超伝導体を多数開拓され、長年にわたる高い功績は際立って高い評価を得ております。齋藤先生が開拓された機能性物質は、輸送現象、磁性、光物性、理論科学に渡る広範囲の物性科学における研究対象となっています。これらの多くのご貢献により、今回の受章のみならず、井上 学術賞（1988）、仁科記念賞（1988）、日本表面科学論文賞（1991）、日本化学会賞（2003）、BCSJ論文賞（2005）など多くの賞を受賞されています。

こうした研究活動に加え、2002年より2007年まで、21世紀COE京都大学化学連携研究教育拠点のリーダーとして、若手研究者の育成にもリーダーシップを発揮されました。国内においては、平成1996年から2004年まで、文科省学術国際局の科学官を務め、2005年か

ら日本学術振興会の国際事業委員会委員、2006年からは同会の学術システム研究センター主任研究員（化学）、更に、2007年から科学技術振興機構の調整費研究領域主管プログラムオフィサーを務めるなど、我が国の学術研究の発展に大きく貢献されました。また、2008年より日本学術振興会の産学協力研究委員会第181委員会「分子系の複合電子機能」の代表者として、産学連携にも尽力されています。今回の紫綬褒章受賞は、以上のような功績が高く評価されたことによります。

このように、永年にわたって有機低分子を主体とした機能性有機材料の開発を行い、先駆的な研究業績を数多く挙げ、機能物質化学の発展に大きく貢献されました。特に、この化学と物理学の境界領域である物性化学は、研究分野も、また日本における研究連携体制も世界が目指すところであり、齋藤先生の貢献抜きでは考えられません。

齋藤先生は、現在は名城大学の総合研究所に移られ精力的に研究活動を続けられています。今後とも日本の物質科学と物性化学のさらなる発展と当該分野の人材育成・拠点形成の国際的なトッパーとして精力的なご活躍を続けられることをお願い申し上げます。

（中村敏和 記）